

破黙への教父学

今道友信

教父学に於ける分類の原理は、時間軸によるよりも、言語によっている。それゆえ、シリア語で書いた教父はシリア教父と呼ばれ、コプト語で書いた教父はコプト教父と呼ばれ、一般にはかなり時代的な特色が見られるにしても、二世紀の教父、三世紀の教父と言うような時間的横断性を以て展望するという試みは少なかつた。それゆえ、教父の規定のひとつである古代性 (*antiquitas*) というのもかなり曖昧で、一時期にはミニーユたちのように中世の学者たちまでも教父にしてしまう者もいた。教父に限らない問題であるが、この時間的限定性については、特にその下限をどうするかは興味深い設問になるであろう。作家のモオリヤックが言ったことであるが、後何千年か経てば、われわれは古

代キリスト教徒になるのだ、という言葉があるが、これは本当のことだ。それゆえ、いつかわれわれも教父時代の人びとにされる可能性のある呼称にならないためにも、教父の時間的限定の下限性に関して、その理論的根拠とともに、明確な線を共通認識として引いておく試みをした方がよろしい。それは固有の意味での中世哲学の起点と同じだという考え方もあるが、そもそもその中世にしたところで、いつかは古代に吞み込まれてしまうのであるから、これで満足するわけにはゆかぬ。言語による分類の美点のひとつは、キリスト教にふさわしく肉の生まれとしての民族や国籍をあまり表面に立てないことである。ただ、またそのために隠れてしまった史実もあって、キリスト教を誤解させたこともある。

ギリシア教父の代表者ニッサのグレーゴリオスもラテン教父の代表者アウグスティヌスも、いずれもペルシア人とアフリカ人であって、教父時代にキリスト教を支えたのはいわゆる西洋人だけではないので、今でもキリスト教やその文化は西洋のものと思っっている日本人が多いのに対しては、こういう人類共同の営みとしての教会の史実を明示するとともに、われわれ東洋人も教会のために多くの理論的発信をして、教会のため、神のための理論的献げものをゆたかにせねばならない。もしも教父が古代性のままで放置されれば、何千年かの後にはわれらも教父時代の人びとだ。そのとき日本語で書いた教父として意味のある日本教父がないというのも怠惰なことではないか。私は民族のことではなく神がゆるした言語のひとつのことを言っているのだ。